



欢迎

Bem vindo



特集

# ようこそ豊橋へ!

## 共にまちを盛り上げよう

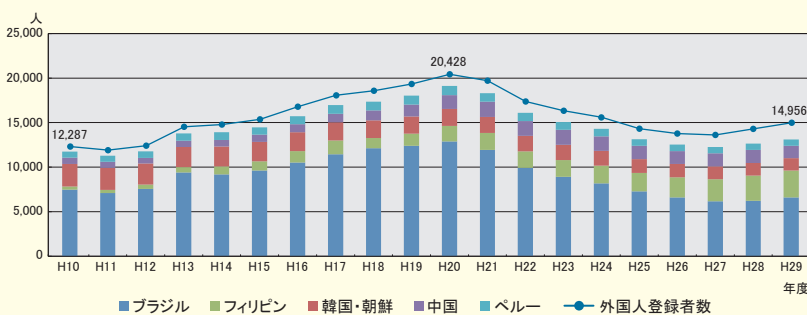
17,159人。これは豊橋に住む外国人の人口です（平成30年12月1日現在）。ブラジル、フィリピン、中国など国籍は71か国にも上り、多国籍化が進むまちと言えます。

今回の特集では、日本人と外国人が共に活躍し、地域全体でまちを盛り上げる多文化共生の在り方について考えます。

問合せ：多文化共生・国際課 ☎51・2007



表1) 豊橋市の外国人人口の推移



市民課「外国人住民国籍別人員調査票」より(各年4月現在)

### 豊橋に住む外国人の多様化

10年前のリーマンショックを契機とする景気後退の影響を受け、多くのブラジル人が帰国したことにより、ブラジル人人口は平成20年の約1万3千人をピークに減少しました。一方で、フィリピン人が20年前の約10倍に増加。現在はブラジル人に続き、市内で2番目に多くなりました(表1)。また、在留期間に制限のある「定住者」は減少し、期間の定めなく日本に住み続ける「永住者」の在留資格を取得する外国人が増加するなど、豊橋の外国人を取り巻く状況は大きく変化しています(表2)。







## 同じ地域住民として まちを盛り上げる一員に

日本では少子・高齢化による深刻な人手不足やグローバル化の進展により、外国人人材の必要性がますます高まっています。スーパーグローバル大学に認定された豊橋技術科学大学でも、留学生の受け入れ拡大を国際戦略として進めており、今後も市内の外国人の増加・多国籍化が進むと推測されます。

文化や習慣の違い、言葉の壁から外国人との共生に対する不安がある方もいるかもしれません。しかし、就労を目的に来日する外国人の意欲的な姿勢は、日本人にとって刺激となることもあります。また、日本人とは異なる視点が、新たな気付きや発想を生み出すきっかけになる可能性も秘めています。私たちのまちを共に盛り上げる力となり得るのです。

外国人増加の要因となった入管法の改正から間もなく30年。4月からは、新たな在留資格の創設が予定されるなど、外国人の受け入れへの門戸が広がりつつあります。受け入れには、生活者として迎え入れる環境整備が必須です。まず、私たちが同じまちに暮らす隣人として歩み寄り、助け合っ

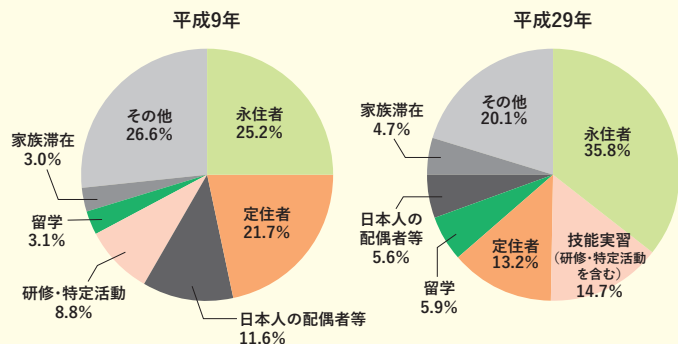
て生活することが、相互理解の促進の一步に繋がるのではないのでしょうか。



多文化共生・国際課  
今村 仁



表2) 愛知県在留資格別人口の割合



※ … 平成9年は技能実習を「研修・特定活動」として表記

法務省統計データより (各年12月末現在)

他方で、同じ地域で暮らしながらも、いまだ外国人との間に距離を感じる日本人が多くいるのも現状です。市が行った市民意識調査では、「外国人市民が増加することをどう感じるか」という質問に対し、好意的に感じる市民の割合は約45%にとどまっています。外国人犯罪の報道や、マナーの悪さなどの風評により外国人に対して悪いイメージを抱く日本人も少なくありません。

そんな中、自治会の活動に外国人も多く参加するなど、日本人と外国人の距離感が近くなってきた地域もあります。また、日本では人口減少や高齢化が進む中、地域経済を支える貴重な人材として外国人の役割は増えています。地域がより発展していくために、外国人を含めた全ての市民が活躍できる社会づくりが求められています。



## 子どもの夢・希望・未来への懸け橋

—日本語指導を通じて将来の選択肢を広げる—

親と共に来日した子どもの中には、日本語が十分に理解できず、日常生活や学校での学習に支障がある子どももいます。ここでは、日本人と一緒に学校生活を送ろうと奮闘する外国人生徒に密着しました。



### 質

問が飛び交い、笑い声が絶えない教室。ここは、豊岡中学校の校内にある初期支援校「みらい」です。

みらいは、来日して間もない外国人生徒に初期の日本語指導を行うために、昨年4月に設置されました。これまでに、ブラジル・中国・フィリピンなど3か国から来た中学生41人が市内全域から通い、現在も8人（平成30年12月10日現在）が学んでいます。月々木曜日はみらいへ、金曜日は本来在籍する中学校へ通学。みらいでは、2人の先生とポルトガル語・タガログ語・日本語の相談員各1人による指導のもと、生徒たちが8週間（約160時間）、日本語の会話や文法のほか、数学や英語などを日本語で学びます。

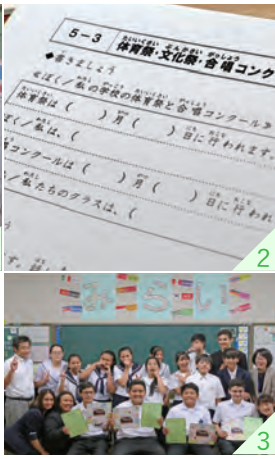
「基本的には日本語で教えますが、『ここでは押さえておきたい』という大事なところは母語で教えています。初めは無理をさせず、精神的なケアを大事にしています。」と話すのは、コーディネーターとして日本語の指導や相談を行う築穂相談員。環境の変化により、さまざまな不安を感じている生徒もいるため、『丁寧にエンジン（掛けたい）』という考えから、教室内には母語の本を配置。また、各中学校の行事や学習内容を記録した日誌を置くことで、それぞれの学校に戻った際に適応しやすいようにするなど配慮を欠かしません。

「はい、分かりました。」「私は体育祭に出ます。」生徒が手にして読み上げているのは、手作りの日本語ワークブック。多言語版を用意し、学校や日本での生活について紹介するなど、日本語を学びな





1. 文法だけでなく、日本で生活する上でのマナーや規則も教える築穂相談員。2. 日本語ワークブックは学校行事を日本語で学べる。3. みんなからの寄せ書きをもらい、涙と笑顔が入り交じった修了式。



昨年5月に行われた第一期生の修了式。そこには、別れを惜しんで涙ぐむ生徒たちの姿がありました。「日本語は難しい。でも、勉強はすごく楽しい。」みらいの卒業生全員が笑顔で語ってくれました。

がら日本の文化や伝統を理解できるようになっています。「声に出すことで語学力は伸びます。生徒が生き生きと学べる指導を心掛けています。」  
1〜3年生が集うので、数学や英語の学習内容は学年によって変わります。また、随時生徒を受け入れるため、授業の進み具合も違ってきます。先生たちは、こうした状況を踏まえ短い期間で集中して指導を行うために、教科によっては教室を区切って2人の先生が教えたり、生徒用に辞書代わりとなる日本語の手引きを作ったりと試行錯誤を重ねています。そのかいあって、当初は日本語を話せなかった生徒が、日本語で作文を書き、発表するまでになっています。

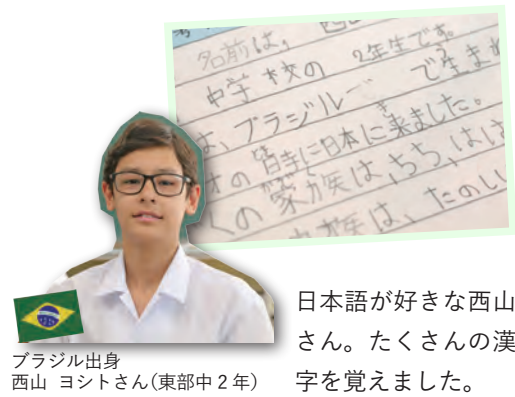
みらい  
一期生の  
みなさん

8週間の学習期間を修了したみなさんの素顔を紹介します。



ブラジル出身  
西岡 ナタンさん(東部中2年)

相談員が隣にいましたが、自力で聞き取れるようになりました。



ブラジル出身  
西山 ヨントさん(東部中2年)

日本語が好きな西山さん。たくさんの漢字を覚えました。



フィリピン出身  
エストルバ ジャマシさん(豊岡中1年)

クラスのムードメーカーとして、元気にあいさつをしてくれました。



ブラジル出身  
アラカキ リュウジさん(東部中1年)

夢は多言語を話せる医者。授業で、たくさん発言しました。



中国出身  
彭 越さん(豊城中3年)

数学と英語が好きな彭さん。挙手する時の笑顔が印象的です。

それぞれの学校に戻ってからも、みんなが日本人の友達と馴染んでいる姿を見るとうれしいですね。



初期支援校コーディネーター  
築穂 博子

初期支援校

みらい

みらいは、市内でも外国籍の子どもが多い地域や通学の便を考慮し、豊岡中学校に設けました。豊橋市の外国人生徒は601人(平成30年9月1日現在)と10年前の倍以上に上ります。そのうち約9割が高校に進学する中、日本語が十分に理解できないまま進学する子どももおり、来日初期の日本語指導が課題となっています。今後も、日本語や日本で生活する上で基本となる部分の指導を行い、子どもたちが未来へ夢を抱ける場所となるよう取り組んでいきます。

問合せ：学校教育課 (☎ 51・2826)





## 苦労も喜びも分かち合う職場

—適切な就労環境で、安定した社会生活を送る—

豊橋では、外国人労働者数とその雇用事業所数の増加が今後も予想されています。日本で働くこと決めた外国人労働者の想いと、雇用事業所の取り組みを追いました。



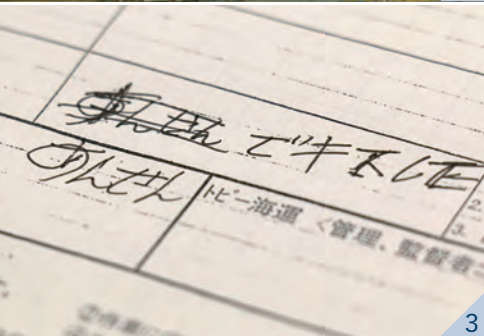
**金** 属加工や切削を行う宮城工業㈱で塗装の仕事をしている古川ジーズさん、54歳。昨年2月から働き始めた古川さんは、慣れた手つきで仕事をこなします。「大体のことは一人でできるようなりました。」

古川さんは一昨年、市が行う「定住外国人等就労支援事業（左ページ参照）」に参加。約2か月にわたる日本語やビジネスマナーの研修を修了後、面接や2か月の試用雇用を経て、正規雇用に至りました。「外国人も賃金は一緒です。一番不安なのは言葉でしたが、面接の際に、ある程度コミュニケーションがとれたので、大丈夫だろうと思いました。」と社長の深川さんは当時を思い出します。

15年前、ブラジルから妻と息子と一緒に来日した古川さんは、両親に仕送りをするため豊橋や茨城で派遣の仕事をしながら生活していました。子どもはすぐに日本語を習得したものの、当時40歳近くの古川さんが一から言語を覚えるのは大変なことだったと言います。現在は「お願いします」「初めてだから分からない。」など片言の日本語で伝える努力をしています。

宮城工業㈱では、全社員が朝礼時に「手元、足元に注意」「安全確認は指差し呼称」などの安全宣言を行い、終礼時に達成できたかをノートに記載します。日本語がまだ十分に理解できない古川さんには、社員が毎日繰り返し短い単語や易しい言葉で話したり、ゆっくり話したりして理解できるまで教えます。周りの人の手伝いもあって、今では古川さんもその意味を理





1. 危険な作業は周りの社員がより丁寧に教える。2. 安全宣言は覚えたての日本語で書く古川さん。3. 「あんぜんできました」は毎日書くひらがな。4. 仕事中的古川さんの目つきは真剣そのもの。5. 社長の深川さんは社員の健康管理にも気を配り、いつも声を掛けている。

解し、ひらがなで書けるようになりました。できた時は一緒に喜んでくれる社員の優しさを感じながら働く古川さんですが、時には厳しい言葉を掛けられることもあります。吊り具を使って80kgもの鉄鋼を運ぶこともあるため、一歩間違えば危険な事態もあり得るのです。「危ないことは怒っても伝えなければなりません。体が一番大事。だからこそ、特別扱いはず、

みんなと同じ扱いをしています。」と深川さんは話します。勤務時間が午後3時までのため、終業後の時間を有効に利用したいと考えた古川さん。昨年9月から、日本語教室に通い始めました。「日本語を覚えて、もっと社員のみんなとコミュニケーションをとりたいです。」

## 定住外国人等就労支援事業とは？

市が行う日本語・ビジネスマナー研修を修了した外国人と市内事業所とのマッチングを行い、一定期間の試用雇用を経て、正規雇用への移行を支援します。

1



**日本語・ビジネスマナー研修**  
月・火・木曜日 19:00～21:00 に NPO 法人 ABT 豊橋ブラジル協会にて約2か月間、日本語の文法や敬語などを学びます。

2



**面接会**  
製造業や接客業など、市に申し込んだ市内事業所約10企業との面接を行います。通訳も同席し、雇用形態など詳細を聞けます。

**試用雇用**  
市内事業所で約2か月間（最長3か月間）働きます。



通訳もいないので、日本語と同時に仕事を覚えるのが大変でした。

3



4

お互いの条件が合致し、良い関係で働いています。



**正規雇用**  
事業所との合意の上、正規雇用へ移行します。



## 岩田団地ならではの地域の形

—地域の担い手として活躍する協働のまちづくり—

外国人が多く住む団地では、日常生活にまつわるトラブルがしばしば発生します。そんな中、さまざまな問題を地域の取り組みの中で解消している自治会「岩田団地」取材しました。



### 行

列を作って待つ子どもたちの目当ては、輪投げや射的、かき氷。昨年8月に岩田団地で行われた夏祭りでは、さまざまな言語が飛び交っていました。

岩田団地は、市内でも外国人が多く暮らす場所の一つ。現在、約560戸の入居者のうち半数以上をブラジル国籍やフィリピン国籍が占め、外国人住民の数が日本人住民の約3倍にも上る外国人集住団地とも言えます。また、日本人住民は、高齢の夫婦や一人暮らしが増える半面、外国人住民の年齢層は低くなっています。

「外国人だろうがここに住んでいる限り平等だよ。」こう話すのは自治会長の阿部準治さん。岩田団地では外国人住民が増えてきた10年以上前から、チラシや団地内の放送をポルトガル語・タガログ語に翻訳・通訳して情報を共有しているほか、自治会役員や組長名簿には3分の2以上の外国人住民が名を連ねています。

夏祭りでフランクフルトを販売していたクボ・ブルーノ・トキミさん（19歳）も、役員の一人。4歳の時にブラジルから来日し、現在は仕事をしながら環境美化の役員を務めています。「母は日本語ができませんが、分からないなりに組長をしていました。住民みんな協力してやらないと成り立たないですよ。」

役員の中で最も若く、ポルトガル語も日本語もできるクボさんは、住民にごみの分別の周知や、月1回の清掃活動への参加を呼び掛けるなど地道に働き掛けています。「大変だけど、役員をしていると住民に自分たちのことを知ってもらえるし、





1. 最年少役員のクボさん（左）。飲食の販売だけでなく通訳としても大活躍。2. 自治会長の阿部さんとクボさんは互いの信頼関係も厚い。3. 年季の入ったかき氷機は岩田団地の夏祭りの名物。4. クリスマス会は夏祭りと並ぶ子どもたちに人気の行事。5. 防災訓練は短時間にし、体験型の訓練を増やすようにしている。



住んでいる以上は助け合わないとね。

お互いさまだね。

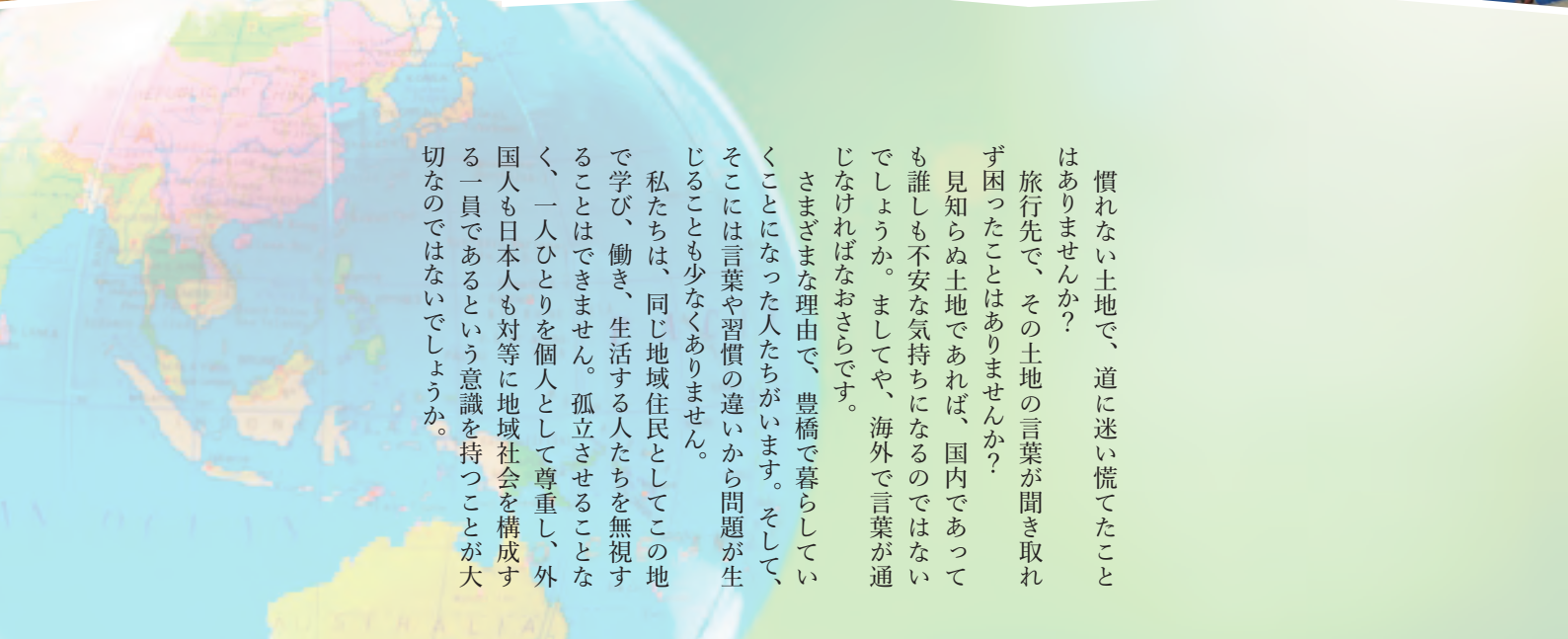


災害対応マニュアルは、3か国語で用意し、イラストを多めにしています。



ごみのことも分かってきてくれてありがたいです。」  
 団地内の集会所は、ほぼ毎日開いており、役員や通訳が常駐しています。「風呂場が詰まった」「水漏れした」など用事があれば相談でき、問題の解決に繋げてくれるため外国人住民にとっての拠りどころとなっています。また、夏祭りだけでなく、防災訓練や日本語教室、クリスマス会なども開催。多くの活動への参加を通じて自治会活動へと引き入れる仕組みができて上がっているのです。「住んでいる以上は、お互い助け合おうべきだと思っています。支えていこうという気持ちではありません。一緒に巻き込んでやっていこうという気持ちが大

事です。」と阿部さんは話します。  
 話せば気持ち分かる、みんなの顔が見える。高齢者・外国人住民・子どもが多く住む岩田団地ならではの地域の形ができています。



慣れない土地で、道に迷い慌てたことはありませんか？  
 旅行先で、その土地の言葉が聞き取れず困ったことはありませんか？  
 見知らぬ土地であれば、国内であっても誰しも不安な気持ちになるのではないのでしょうか。ましてや、海外で言葉が通じなければなおさらです。  
 さまざまな理由で、豊橋で暮らしていくことになった人たちがいます。そして、そこには言葉や習慣の違いから問題が生じることも少なくありません。  
 私たちは、同じ地域住民としてこの地で学び、働き、生活する人たちを無視することはできません。孤立させることなく、一人ひとりを個人として尊重し、外国人も日本人も対等に地域社会を構成する一員であるという意識を持つことが大切なのではないでしょうか。